Argonauta 21:15-16 (2012)

大垣先輩を偲ぶ

大塚　攻

1982 年、私が京都大学瀬戸臨海実験所（以下、瀬戸と略す）に大学院博士課程前期の学生として入所した時、大垣さんはたしか博士課程後期 2 年生で、研究室ではとなりの席であった。ちょうどこのころ、研究棟を改築しており、我々は赤い屋根が印象的な木造平屋の建物の中の大部屋で一時的な共同生活を送っていた。この建物の別な一室には私の指導教官であった伊藤立則先生もおられた。今でも印象に残っているのは、大垣さんの机の上はいつも整然と整理されていたことである。また、常に規則正しい生活をされており、仕事を終えると明日こなすべき仕事の内容が箇条書きに書き込まれたメモを置いて退室されていた。「几帳面」という言葉がまさに当てはまる方であった。某氏は「きっちりきちきちの大垣さん」と敬意を多分に含ませてそう呼んでいた。私の在籍時、大垣さんはアラレタマキビの産卵行動と潮汐リズムとの関連性について野外調査を活発にされていたが、Publications of Seto Marine Biological Laboratory や南紀生物に発表された研究成果の別刷をいただいた。私もプランクトン中に発見されるタマキビやアラレタマキビ、ヒザラガイなどの底生動物の浮遊卵なども研究していたので、タマキビ類の浮遊卵などについて丁寧に文献などを教えてくれた。また、ちょうどこのころ、ダムが自然環境に及ぼす影響も調査されており、教官・院生で定期的に開催していたゼミナールでこの内容を発表した時、論点ははっきりと思い出せないのであるが、大垣さんが当時の所長であった原田英司教授と激論をかわしていたことを覚えている。私が学部時代に所属した広島大学では経験したことのない激しい議論に度肝を抜かれた。京都大学ならではと感じたものである。しかし、大垣さんは日常、言葉少ない方であったが、いつも気遣いをしてくれる先輩であった。時々あげる子供のような屈託のない笑い声は今でも耳に残っている。他大学からぽつんと瀬戸に入学した身にとってなんともありがたかったことか。

当時、瀬戸では院生がチームを作って和歌山大学の学生などとソフトボールの対抗試合をしたり、すでに結婚されている院生の方の自宅に招待を受けてお酒をともにするなど、孤独に陥りやすい臨海実験所という環境でのひとときの楽しみを見いだしていたが、そこには大垣さんの姿はいつもなかった。ご自分の生活はきっちりと規定しており、これらの娯楽は大垣さんの生活のメニューの中にはなかったようである。自分を一貫して律する生活を好み、流される生活を嫌う大垣さんであった。徹底した自己管理であった。

私は瀬戸に来てから 3 年目の 1985 年、幸いにも母校で職を得ることができたのだが、瀬戸を離れる直前、大垣さんは自宅に招いて手作りの料理を供して一緒に喜んでくれた。

忘れられないことであった。1992 年、ロンドンにある Natural History Museum に留学した時、タマキビ類の分類学で世界的に著名な David Reid 博士に、大垣さんが南紀生物に発表されたタマキビ類に関する日本語の論文を英語に翻訳してほしいと依頼されたことも忘れられない。喜んで引き受けた。大垣さんとの因縁を感じた。

私の専門がプランクトン学であったこともあり、瀬戸を離れてからは学会などで大垣さんとあまり会うことはなかったが、田辺湾に浮かぶ畠島の底生動物調査を長期間調査され、その遷移状況を南紀生物に発表されていたので研究を活発に続けられている様子を垣間見ることができた。また、私が所属する日本プランクトン学会と大垣さんの所属する日本ベントス学会が合同で開催されるようになり、10 年ほど前だったか、ばったりとお会いして、髪の毛が真っ白になられているのに驚いた。

今年になって大垣さんの突然の訃報を聞いた時には愕然とする思いであった。伝え聞くところ、重い病を患った末の苦渋の決断だったようである。遺書には葬儀をしないように、とあったらしい。最期まで自分を誇示することを嫌う大垣さんらしい。自然を心から愛し、海洋生物の研究をこよなく愛した大垣さんは、研究が思うように続けられなくなった状況に苦悩されていたのではないだろうか？生前の御厚意、心より感謝しております。大垣さん、今はどうぞ安らかにお眠りください。

（おおつか　すすむ・広島大学大学院生物圏科学研究科　附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター　竹原ステーション）